証しが書ける喜び

島本　耀子

私の随筆の先生は女性指導者グループの一人だったが、女偏の文字にマイナス・イメージを持っていた。「嬉」と、塵取りと箒を持つ女を意味する「婦」は使用禁止。よほど誇り高い女性の主張か、内々の約束事だと言う。

文字は文化である。勝手な使用禁止は嬉しくない。しかし、黙って従っていれば、学ぶことは多く、書く楽しさもあった。

仲間は、寺社廻りや写経体験を遠慮なく書く。数年して私も、おずおずと証しを書いてみた。講師は違和感があるから駄目だと言う。キリスト教も、禁止事項の一つだったのだ。

信仰には触れず、生き方を書いている参考だ、と言って講師がくれたのは、ＪＣＰの元会員が書いた本だった。よく読むと、講師の嫌う証しもきちんと書いてあるのが嬉しかった。

回り道の角で神様は私に、あかし文章を学ぶきっかけを与えてくださったのだ。

嬉も喜も心は同じ。制約に縛られてきた経験が、今は喜びに変わっている。

あなたが運んでくださった

山本　千晶

その夜、季節外れの台風がのろのろと沖縄に近づいていた。ホテル日航那覇。十月二十七日。この夜のコンサートで私は不思議な体験をした。

会場はホテルの最上階。見下ろす窓の外、大粒の雨と吹き荒れる風を受け木々が大きくしなっていた。

「私の歌声、ちゃんと後ろまで届くかしら」

室内に目を移した私は不安な気持ちに襲われた。一方、満席の会場からは歌声を聴き逃すまいとの期待が伝わってきていた。悪天候の中にあっても誰一人、予約を取り消すことなく参加している集まりだった。

深く大きく息を吸い歌い始めたその時、私は感じた。「ああ、隅々まで声が届いている」

次の瞬間わかった。「神さま、あなたが運んでくださっているのですね」

魂からの歌声を、そっと届けてくださる。喜びながら歌声を運んで下さる神さま。その働きに支えられながら歌い続けた夜だった。

「アバ、父よ」と呼べる喜び

遠藤　幸治

母親の胸に安心しきった顔で抱かれている幼子をじっと見つめていた。幼子は意識することなく母に対する絶対的な愛と信頼がそこにはあるように思った。

人間の魂もこの幼子のようであったとしたらどうだろう。人生を「揺り篭から墓場まで」と言うが、墓場に行く前に、もう一度、揺り篭を経験する人こそ本当に幸いな人だと言った人がいる。

聖書の世界では母ではなく、神を父と呼ぶ。母をしたうように、父なる神の名を呼んでいる。

私は小さい頃、父親が厳しかったからか、父と言う言葉に怖いイメージがあった。が、信仰を与えられてからそのイメージは消えた。

父なる神を愛し、嬉しいときも悲しいときも、「アバ、父よ」と呼ばない日はなかったし、これからもそうだろう。

神の子とされた喜びに、子供のようにはしゃぎまくるので、妻は私を変人だと言う。

インマヌエル

須藤　あきこ

一九七八年の秋、二八歳の私の体には弱さが与えられ、教会へ行く道しか開かれていなかった。一年後、哀しみの中でクリスマス礼拝に受洗し、聖書研究の学びから聖書通読をすることが日課になった。「インマヌエル（神は私たちとともにおられる）」（マタイ一章２３節）ということばに出会ったとき、〈イエスさまはいつもともにいてくださる方なんだ〉と安堵感が生まれ、私の心にほのかな明りが灯ったように感じられた。

深い孤独の中に在るとき、「主よ、助けてください。」と呼びかけ、誰も理解してくれない悩みの中で苦しむとき、大きな問題を抱えてどうしたらいいかわからないとき、「主よ、わかりません。どうしたらいいんですか。」と問うと、主はすぐにこたえてくださる。

眼には見えないけれど、最悪のときにこそ、絶望的なときにこそ、近くから優しく語りかけてくださる真実の主が、いつもともにいてくださることが、私の喜び。

感謝と喜び

有賀　麗子

洗礼を受ける前の年「あなたの歩むべき道にあなたを導く」と示され、神様から、書きなさいとのメッセージが来た。

受洗後、毎朝聖書を読み、祈る、という生活スタイルに、週日ごとの礼拝出席が加わり、二十三年の歳月が流れた。

自分では、信仰第一の生活だと思っていたが、実際は、書くという主の導きに反抗し、家庭と経済活動優先の、生活だった。

家族とお金を偶像としている罪に気づかずにいた。問題が来ると、主から、夫と子どもを手放しなさいとサインが来たが、手放すことの意味が、長い事わからなかった。

ある時、手放すことは、委ねることと教えられ、家族のこともその他すべてを全知全能の主に委ねきって、ペンを執ると決めた。二十四年という年月を、なんと無駄にしてきた事かと涙がでた。いままで主を信頼しきれずにいたことを悔い改めた。

すると、後悔の涙が、日毎に感謝と喜びに変わってきた。

再会

西山　純子

第二次世界大戦最中のこととうかがった。

十九歳と十七歳の青年が、現、日本基督教団上富坂教会の学生寮で、寄宿生として出会った。当時、学生とは言え戦時下の大変厳しい状況の中での出会いであったに違いない。そこで彼らは二年間寝食を共にした。

そして六十年後、年長の青年は牧師となって津田沼に在住し、多くの信徒を導いていた。近隣の船橋教会に赴いた折、その教会の役員の子息が、昔出会った二歳年下の青年であることを知った。彼は習志野市で、小児科医として開業していた。未信徒であった。

年長の彼は私の属する教会の前牧師、小児科医の彼は私の子どもたちが乳幼児期からお世話になった医師であった。

クリスマスに、小児科医夫妻は、かつての寄宿舎仲間の牧師によって洗礼を受けられた。文字にすると、簡単に綴られてしまうこの一事が、今の自分にはかけがえのない喜びである。

主に愛される喜び

林　文彦

聖書に、いつも感謝していなさいとあります。でも常に喜びの感謝ばかりではありません。喜びとは満足の歩みです。人間には悲しみの中でも、お祈りは出来ますが、豊かに愛することは出来ません。

八十歳近くなっても思うのは、一番の喜びは長女の小学校入学式でした。何年経っても変わらない想い出です。

バプテスマの時は、神様を全て受け入れて日々共に歩んで下さる喜びと、神が私を選んでくださった感謝の記念すべき時でした。

幸せな結婚も、共に歩む者を神より与えられた第二の人生の始まり、喜びも特別なものです。幼少の頃から教会生活で主日礼拝に出席する度に、新しく与えられた一週間も、主の守りの中で歩むことができ、天国への約束までも与えられていることを覚えて感謝をしました。

三人の子どもたちも信仰を与えられ、喜びと感謝でいっぱいです。

信仰を与えられた喜び

荒井　文

聖書には『あなたの若き日にあなたの造り主を覚えよ』とあります。私は二十代で自分を造られた神を知りました。ほんとうによかったと、この年齢になってみてつくづくおもいます。

信仰を持ったからといっても、決して楽な人生ではありませんでした。何回となく悩み苦しみに遭いましたが、その度に不思議に助けられてきました。

今もその中にいます。六十五歳を過ぎてから次から次へと病気が追いかけてくるようになりました。ついに心臓不整脈がみつかり、二〇一〇年の年末から新年にかけて入院し、ペースメーカーの植え込み手術を受けました。おかげで階段の上り下りも息切れが無くなりました。早く発見できたのも、よい病院を紹介されたのも、すべて神様の導きであると確信できました。

生かされていること、信仰を与えられていることに気づかされ、喜んでいます。

生活のリズム

佐藤　一枝

自分の生活のリズムを自分でコントロール出来る環境、若い頃には想像もつかなかった解放感である。一人暮らしになってみて初めて知った喜びである。多少の淋しさは主人が癌で若死にした当時はあった。が、それから二十数年も経ち、子供たちは独立し、今は淋しくもなんともない。

日曜日の聖日礼拝、水曜日の午前にある夫人祈祷会、ＪＣＰの例会と詩の会、これらを休まず守ることが私の生活のリズムの中心となっている。

一人暮らしは良いことだらけである。聖書を読む時間も、お祈りする時間も、朝晩のデボーションの時間だけでなく、思いつけば何時でも行うことが出来るのである。年を重ねる毎に、主とのお交わりが魂の喜びとして鮮やかになってくる。心臓病をかかえてはいるけれど、生活に支障をきたすほどではない。

主イエスさまのお守りの中で、生活のリズムをコントロールしてゆける事を感謝したい。

パウロの回心（使徒の働き九章より）　亀井　正之

サウロは、突然の強烈な光、たたきつけられた焼けた灼熱の砂、柔和なイエスの声などを切れ切れに思い出していた。目は見えなかったが、眠ることもできなかった。神（エホバ）は、唯一にして全能の神であり、その律法は正しい。サウロは誰よりその律法を知り、守っているはずだった。

救い主といわれたイエスは神（エホバ）を恐れぬ異端者だ。奴が十字架にかかってみじめな最期を遂げたのは当然だ。

しかし何故その男が神（エホバ）のように圧倒的な力を持って私の前に現れたのか。もしかすると彼ら、イエスを「神の子」と信じて宣べ伝えている者どもは正しかったのか。私の頭の中でこれらの考えがグルグルと回っていた。

ついにサウロは今までしたことのない、心からの祈りを神（エホバ）に、またイエスにささげた。彼が捕えにきたアナニヤは、神（エホバ）の使いのように語り、手を当てて目をもう一度開けてくれた。

律法によっては経験したことのない喜びが彼の心にあふれた。

誕生日

加藤　透子

毎年、誕生日の頃になると咲く庭の蔓薔薇。
神様からのなによりのプレゼント。
病を得てから、ヨブのように、生まれてきたことを喜べなかった私。
教会で礼拝の後、牧師が今週お誕生日の人の祝福の祈りをしてくださる。
転会してから一度も前に進み出たことがなかった。
今年初めて手を挙げた。牧師が、恵と慰めとを祈ってくださった。
幸いなことに、今、私は、周囲の方々がお祝いしてくださる恵をいただいている。
これからは、生まれてきたことを喜べるようになりたい。
庭の蔓薔薇は昨年植え替えたが、今年も綺麗に花を咲かせてくれた。
『これは、主が設けられた日である。この日を楽しみに喜ぼう』
（詩篇一一八篇２４節）

つかの間の喜び

北川　静江

今から二十数年前、ある手術の後、急に運動し過ぎたために視力が落ちて、眼鏡をかけるようになった。それが老眼の始まりで、数年ごとに度数が進みその度に眼鏡を買いかえていた。

そして五年程前には白内障が出て来たと言われ、目薬を毎日つけるようになった。遠近両用のかっこいい眼鏡を作ってもらった。

昨年あたりから、それでも白内障の左目がうっとうしく、疲れを感じどうにも我慢ができなくて、白内障手術を受けた。手術は簡単で、二、三時間で帰宅できた。

「見える良く見える。裸眼でどんなに小さな字も読める。薄紫色のエリカの花の小さな一つひとつの可憐さがくっきり見える、眼鏡なしで聖書が読める」

しかし、喜んだのもつかの間で、こんどは遠くが見えにくい。車を運転すると遠くがぼやけるのである。そこで遠視の眼鏡を作った。

ただひとつ、聖書がたくさん読めるようにと祈っている。

伝える喜び

土屋　理絵

私の住む西武池袋線沿線の富士見台という駅近くの車窓から、名前の通りの美しい富士山を眺めることができる。数年前の冬の日、真っ白に雪化粧した富士山が見えた。凛とした姿が立派で雄雄しい。夕日に照らされ燃えるようなオレンジ色に光り輝いていたその光景は、やや疲れていた私へ神様からの贈りものに思えた。

「富士山があんなにきれい！」隣にいた息子に伝えると「本当だあ」と感動した様子。喜びを分かち合う相手がいたことで嬉しさがさらに増す。そして、周りの乗客たちが一斉に景色を見始めた。頷いたり、携帯で写真を撮ったり、その顔は満足した笑顔だ。夕景は乗客みんなの心をも照らした。

私は美しい富士を見られたことはもちろん、車内にあっという間にグッドニュースが伝わり、広まり、共に分かち合えたことに大きな喜びを感じた。本当は誰だってみんな良い知らせを待っているのだ。こんなふうに「神様の愛ってすばらしいよ」というメッセージをゴスペルを通して伝えていきたい。それが私の喜びだから。

嘆きが喜びに

三浦喜代子

そのときも祈っていた。涙の捨てどころがなくて、神様の前にうなだれていた。夫の放蕩はますます度を超し、家庭は崩壊寸前、今にも心の背骨が砕けそうだった。

夜の明ける前に主を呼んだ。娘たちを教会の幼稚園に送り届けるとまた坐した。深夜は時を忘れてひれ伏した。

しかし事態はいっこうに変らない。

「主よ、あなたはどこにおられるのでしょう。わたしの声は届かないのでしょうか」

闇の中でもがいていたとき、ふと、光を感じて頭を上げた。と、思いがけなく透きとおった淡い水色の空が広がっていた。我を忘れて見とれた。そのうちに、ひたひたと心に寄せてくるものがあった。なんと、静かな喜びであった。いつしか潮のように心いっぱいに広がり、満ち満ちて歓喜となった。

「主にちがいない、主はここに来られ、わたしの声を聴いてくださっている」

そのときから祈ることが喜びになった。

涙の夜を喜びの朝に

浅見　鶴蔵

「夕暮れ時に、光がある」（ゼカリヤ十四章７節）、「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある」（詩編三十篇５節）

二つのみ言葉は、旧約聖書の中でも意味の深い、愛している聖句です。

人生の中で流す涙は、誰にでもあると思います。神を信じるなら、苦しみも悩みも涙もないわけではありません。娘は小学校の教師をして二十年になりますが、今、いじめに苦しんでいる生徒が多いそうです。子どもたちのいじめを解決するはずの教師間においても、苦しんでいる人がいるそうです。

朝が来なければいいのにと、眠れぬ夜を経験した人は、多いのではないでしょうか。なぜ苦しみがあり、涙があるのでしょうか。それは心に自己中心と罪の蓄積があるからです。しかし神は悔い改めと静かな一人ぼっちの夜に多くの恵みと愛と真実の数々を与えてくださいました。私は何度、涙の夜を喜びの朝に変えていただいたことでしょう。

願いごとひとつだけ

志田　雅美

神さま、私に愛をください。
心の中を隙間なく、愛で埋めてください。
その愛で、渇いた人々をまるごと包みこむことができますように。
もしも、神さまがたったひとつだけ願いを叶えてくださるとしたら、私は愛を求めるだろう。
私の愛は幼くて、神さまの愛とは比較にならないくらい小さいものだけれど、それでも、与えられた人生の年月を、愛することに費やしたいのだ。時に、愛せない自分に苦しむかもしれない。愛が伝わらず、傷つくかもしれない。でも、真の愛と喜びは、傷みなくしてありえないと、イエスさまが教えてくださった。
だから、愛が欲しい。イエスさまの十字架を見つめながら、喜びに溢れて歩むために。

『愛はすべてを完成させる絆です』（コロサイ三章１４節）

バイオリンの発表会

長谷川和子

昨秋孫のバイオリンの発表会があった。

自分の希望で四歳から習い初めて五年、当初は出てくるなり右手に持った弦を家族に向かってニコニコ顔で振り、弾き終わるとペコンと頭を下げ、その場でピンピン跳ねていた。会場から温かい笑声が起こった。

今回は立派な態度であった。白のワイシャツに紺のネクタイ、黒ズボンと黒靴。しっかりした足取りで進み深々と頭を下げ、バイオリンを構え弦を添える。「ホーム・スイート・ホーム」を静かに弾き始めた。音もよく出ている。力強さと柔らかさを淀澱なく弾きこなす横顔は凛凛しかった。

その後中学生のお兄さんお姉さんと三人で「スワニ―河」を弾き、ヘンデルの曲を弾く講師七名の中に孫の姿もあった。

終了後「まちがえちゃったよ」と笑顔で話す。「気がつかない位に素晴らしかったよ。感動したわ」「それは好かったね」と大人っぽい言い方に家族一同温かな雰囲気に包まれた。

昼讃え　夜歌いて

槇　尚子

若い日、たとえどんな状況でも神を讃えなさいと老牧師はにこにこして言った。たぶん厳しい人生を潜りぬけてきただろう牧師のその言葉は、いかにも単純だった。

遠くに住む娘たちが帰ってきた。久々に家族がそろい、健康であることを感謝して食前の祈りをした。

子どもの反抗期、夫との確執、長い介護の険しい日々、そして私自身の入院手術、といくつかの山坂を経験してきた。その度ごとに順境であろうと逆境であろうとわが喜びは主にあり、と教えてもらった。しかし生身の私は、それは信仰上の建前のようにしか思えないことがあった。

時は流れ、子どもは成長した。介護からは解放され、夫と二人の穏やかな日々が訪れた。

共に祈り、食卓を囲む。家族はみな健康だ。

神様、これこそあなたが下さった平安です。どんな時もあなたを讃える信仰を私に下さい。これこそ私の喜びです。

喜びのお通夜

松下　勝章

贔屓のタイガースはスワローズが苦手だった。しかもその“巣”、神宮球場では、いつもやられていた。

神宮球場といえば、その主は、明治神宮、明治神宮の主は明治天皇、その先々は「神々」に連なる。「神々」が相手なら、分が悪い。

そんなタイガースに昨年、凄い奴がやって来た。「打つ宣教師、マートン」だ。春先からヒットを重ね、その夜、イチローの持つ日本人記録を更新した。記録が出る気配がバッターボックスに漂い、次の瞬間、カーンと元気な打球が外野に飛んだ。歓声、大喜びのファン。元々、メジャーのドラフト一位選手だったらしい。潜在能力は折り紙付だ。「ケチをつける意思」がちょっと足を引っ張ったのだろう。それで彼は日本にやって来た。

そして、お立ち台。計らずも、彼は、大声で、こう叫んだ。「神は私の力です！」。場所は、奇しくも神宮球場。「神々」にとっては、その日は、お通夜だったのかもしれない。

喜びの源泉

富岡　国広

「この世には幸せな人の分だけ不幸がある」とは、誰の言葉だったろうか。

私は幸せについて懐疑的で、それでいて快適な生き方を強く志向した。元々私には大学進学とか有名企業への願望はなく、唯世間を渡る上で人並みの努力はしたつもりである。

何事につけても愚痴を言わず、自分を律し、人の嫌がる仕事をすすんでしようと心掛けもした。こうして友にも恵まれ、一軒の店を任されるようになった。が、生来我儘と協調性のない私が、人とうまくいくはずがなく破綻するのは目に見えていた。

そして教会へ行くきっかけとなったのがウツ病だった。創造主を認め、ウツ病が解消された時の喜びは、今でも鮮やかに脳裏に蘇る。

が、そこでは世における刹那的な喜びの域を脱していなかった。例えば無私の心で奉仕した時に深奥からおこる幸いな喜び、更に進んで聖書は御名の故に迫害される時、「喜び踊りなさい」と言われる。実に、ここにこそ、「喜びの源泉」があるのだ！　と。

喜びの歳月

石垣　亮二

私は会社生活二年目に現在の妻敏子と出会った。彼女は当時教会へ通っており、東京オリンピックの年（一九六四年）に受洗し、その翌年一九六五年九月十九日に私も受洗した。その一ヵ月後に私達は結婚式を挙げた。神様が備えてくださった何よりの喜びの時であった。

ところが、当時の日本は盛んな経済復興期で、私の会社での営業の仕事は、土曜、日曜返上の忙しさであったために、毎日曜日の主日礼拝にはほとんど出席できなかった。そんな時期が約十年も続いた。

しかし天の神様はそんな私を見放すことはなかった。やがて仕事の内容が変わり、教会生活へと還ることができた。神様の懐に戻ることができた幸せと教会での奉仕が喜びとなった。

どんなに多くの苦難と試練があっても、主と共に歩む限り、わたしたちには平安と喜びがあることを覚え感謝している。

喜びのともしび

土筆　文香

中学生のころの夢は「普通の人になりたい」だった。それなら、わたしは普通ではなかったのか？　そもそも普通って何だろう……。

わたしは非常に劣等感が強く、人間失格のように思っていた。運動は苦手だったが、成績は悪くない。なぜそんなに人より劣っていると思ったのか、いま考えると不思議だ。

とにかく自己価値観が低かった。自分なんかいないほうがよいのでは……と思っていた。「どうせわたしなんか」というのが口癖で、心は暗闇に包まれていた。

大人になってから、わたしのためにひとり子、イエス・キリストの命を差し出して下さったお方の存在を知った。

そのお方は、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」と言ってくださった。

そのときからわたしの心に喜びの灯がともった。灯は暗闇を追い出し、どんなことがあっても消えることなく心を照らし続けている。

喜びは神さまからのご褒美

山本披露武

四葉のクローバーを見つけ、みんなで大喜びをしたことがあった。
転んでも転んでもあきらめず、とうとう、自転車に乗れるようになったときもうれしかった。
落とした手帳を届けてもらったときもうれしかったし、拾った財布を届けてあげて、
「母の形見のように大切にしていたものでしたので…」
といって、喜んでもらったときもうれしかった。
思い出の中にいっぱい詰まっているそれらの喜びが、野に咲く花が旅人の心を慰めてくれるように、病気をしたり心配事があったりしてくじけそうになるわたしの心を癒し、力づけてくれている。
喜びは、愛、忍耐、努力、親切等にたいする神さまからのご褒美。そう思って、これからもその一つ一つを感謝をもって受け止め、大切にして生きていきたい。

喜びへの時間

駒田　隆

十九年前に作った十字墓に、わたしは墓碑銘として、「テサロニケの信徒への手紙一五章１６～１８節」にあるパウロの言葉（平時喜悦・常時祈祷・万事感謝）を刻みました。

しかし、妻が召天し、この墓に彼女の骨を納めた時、この言葉を読んで、わたしの心は複雑でした。いったい、喜びとは何だろうか。妻が召されても、喜びなのだろうか、と。

通常であれば、人の死は悲しみであっても、喜びである、とは言いません。おそらく誰もが涙を流してその人を偲ぶことでしょう。それが、普通の人間であろうと思います。

パウロは、その常識を覆しています。「いつも喜んでいなさい」と。わたしには、その言葉が重くのしかかりました。けれどもわたしは、イエス様を信じ、神にすべてを委ねております。妻を失った悲しみを、神に召された喜びに変えねばなりません。矛盾する契機を抱えていても。たとえ、時間がかかったとしても。

命あるもの

青葉亜樹子

小学五年生の十二月、私は病院内の無菌室という個室で生活を強いられていました。衣類はもちろん本や手紙まで自分の手に触れる物はすべて長時間の殺菌灯に通されましたので、消毒臭いものに変わっていました。

面会に訪れてくださる方と直に会って話しをする事も許されません。

お見舞いに花束をいただいたとき

「花が死んじゃう！枯れてしまうからやめて」

私の言葉も空しく、花束は青い殺菌灯の中へ投げ込まれてしまいました。

しかし、私の手に届いた花は長時間の殺菌にも色褪せることはありませんでした。香りも失われず本来の姿をしっかりと保っていました。

「外の匂い。生きている物の匂いだ」

私は何度も花の匂いを嗅いでは、神様の造られた物は、その強さと美しさを失う事はないのだとの喜びに心潤い、満たされました。

大粒の涙が止まりませんでした。